

西部劇の後裔

『オデッセイ』（リドリー・スコット、2015年）

伊藤弘了



© 2015 Twentieth Century Fox Film Corporation.

西部劇は、若さの秘訣にも勝る、
永遠の生という秘密を隠し持っているに違いない。
それはいくらか、映画の本質そのものと重なる秘密なのである。¹

西部への大移動は
われらの時代のオデュッセイアなのである。²

映画『オデッセイ（*The Martian*）』（2015年）でもっとも重要なセリフは、映画の後半で何気なく口にされる“All right, cowboy”かもしれない。というのも本作は明らかに西部劇というジャンルの延長線上にある映画だからだ。だが、なぜ火星に取り残された宇宙飛行士を救出するSF映画が西部劇と結びつくのか。先に答えを言ってしまうと、①アメリカ西部の荒野と火星の砂漠の図像的な近似、②それらがともに「フロンティア」として理解されるべき場所であるという点、③そこで展開される物語が「文明による未開の制圧」という話型をとっている点で両者は接続可能なのである。

映画内容の検討に入る前に、川本徹（『荒野のオデュッセイア 西部劇映画論』みすず書房、2014年）の議論を参照しつつ、西部劇をめぐる言説と歴史的な位置づけを確認しておこう（[]内の数字は本書の該当ページ数をあらわす）。

¹ アンドレ・バザン『映画とは何か（下）』、野崎歓ほか訳、岩波文庫、2015年、11頁。

² 同書、25頁。

西部劇を一言で定義するならば「19世紀後半のアメリカ西部の荒野を舞台に、その文明化の過程を描いたジャンル」ということになる[10]。西部劇を理解する上で重要なのは「19世紀後半のアメリカ西部」という舞台設定と、「文明化」という物語内容である。このとき「19世紀後半のアメリカ西部」は「フロンティア」の同義語となる（フレデリック・ジャクソン・ターナーはフロンティアを「未開と文明の接点」と位置づけている[11]）。西部劇は、物語が展開される舞台（フロンティア）とその内容（文明化）が見事に一致したジャンルなのである。

1890年の国勢調査においてフロンティアの消滅が宣言されたあとも、アメリカ人はその概念を手放さなかった。フロンティア・ラインはアメリカの東アジア進出に伴ってさらに西に向かって押し進められると同時に³、空に向かって伸びていった。1920年代に「空のフロンティア」開拓を本格化させ、マンハッタンに摩天楼を築き上げた彼らが、その視線の延長に宇宙を捉えたのはごく自然ななりゆきである。こうして西部のフロンティアは空のフロンティアを経由して「宇宙のフロンティア（スペース・フロンティア）」へと至る（「スタートレック」シリーズ冒頭の「宇宙、そこは最後のフロンティア」(“Space, the final frontier”)というナレーションを想起されたい)[22]。それに伴い、ハリウッド映画においても、西部劇的な想像力は宇宙を舞台としたSF映画に受け継がれていくことになる。

じっさい、ハリウッド映画において、宇宙飛行士はしばしばカウボーイになぞらえられてきた。そうした例としては『ライトスタッフ』（フィルップ・カウフマン、1983年）や『スペース・カウボーイ』（クリント・イーストウッド、2000年）が挙げられるし、「トイ・ストーリー」シリーズにおいて主人公のお気に入りのおもちゃがカウボーイとスペース・レンジャーだということも象徴的である[23-4]。

映画『オデッセイ』の主要な舞台が、宇宙（スペース・フロンティア）のなかでも特に火星に設定されていることは重要である。アメリカ西部と火星は、アメリカ人の想像力の上で関連づけられることの多い場所だからである。たとえば、川本が例に挙げているように、エドガー・ライズ・バローズのSF小説『火星のプリンセス』（1917年）およびそれを映画化した『ジョン・カーター』（2012年）では、南北戦争後のアリゾナが火星とつながっており、映画版ではアメリカ西部の実景が火星の風景として使われている[22-3]。また、「NASAの探査機「火星のモニュメント・バレー」を調査」(“NASA Probe Explores ‘Martian Monument Valley’”)という見出しを、宇宙専門誌『スペースフライト・ナウ』の現実の記事（1999年）のうちに確認できる[164]。

³ 本作『オデッセイ』では飛行士救出をめぐってアメリカと中国の露骨な友好・協力関係が描かれている。これは今日的な政治関係を反映しているものと考えられるが、地理的に言っても、中国がアメリカ西海岸の延長線上に太平洋を挟んで位置している点を見逃すべきではないだろう。



図 1 (1:18:55) ⁴

『オデッセイ』における火星の映像は、ヨルダンのワディ・ラム砂漠の風景と、この映画のために組まれた巨大な地表セットを組み合わせて撮影されており、アメリカ西部の風景は使われていない⁵。しかし、そうした事実とは別の水準で、広大な砂漠と岩山の映像はやはり見るもののうちに西部のイメージを呼び起こすだろう [図 1]。じっさい、伊藤聡やデイヴィッド・シムズ⁶ といった論者が『オデッセイ』の砂漠の光景からアメリカ西部を連想している。たとえば、伊藤は「主人公が取り残された火星の風景は、まるで西部劇の舞台のようである。宇宙服さえなければ、火星の場面は 19 世紀のアメリカ西部とほとんど見わけがつかない」と述べており、さらに「新しい土地を開拓して生活を根づかせるという意味で、実に西部劇らしいストーリーなのだ」と述べることで、西部劇においてきわめて重要な「文明化」の主題にも触れている（ここで伊藤は『シェーン』[ジョージ・ステューヴンス、1953 年]という具体的なタイトルを挙げることで、西部劇における開拓のイメージを強調している）⁷。

火星に取り残された宇宙飛行士マーク・ワトニーは、映画の大部分の時間を「開拓者」として過ごす⁸。植物学者でもある彼は、食料不足を解消するためにジャガイモの栽培をはじめ、文字通り火星の「植民地化」を試みるのである。科学知識と技術という文明の力を借りて未開の土地を開拓しようとす

⁴ 以下の図はすべて本編からとったものである (*The Martian*. Dir. Ridley Scott. Perf. Matt Damon, Kate Mara, Kristen Wiig, Jessica Chastain, and Donald Glover. 2015. DVD. 20th Century Fox Home Entertainment, 2016.)。

⁵ 本作の公式パンフレットの説明による。

⁶ David Sims. “Why the Mars Movie Is the Space-Age Western”. 2015. *The Atlantic*. (<http://www.theatlantic.com/entertainment/archive/2015/10/the-martian-wild-west/409519/>)

⁷ 伊藤聡「『オデッセイ』 火星で機嫌よく芋を栽培する方法」(2016年)、『cakes』。 (https://cakes.mu/posts/12234#pay_part)

⁸ 伊藤はこの点についても「マーク・ワトニーはカウボーイでありアストロノート。ウッディとバズが合体した、ひとりトイ・ストーリーみたいなキャラだと思う」と的確に指摘している。 (<https://twitter.com/campintheair/status/695639230832218112>)

る姿勢は、まさに「フロンティア・スピリット」を体現したものである（ワトニーを演じている主演俳優のマット・デイモンは、パンフレット用のインタビューのなかで、宇宙飛行士に必要な資質を問われて「西部の開拓者たちが持っていたのと同じ精神だ」と答えている）。彼は不毛の砂漠から土を採取し、自らの糞便を肥料にするという原始的なアイデアを起点にしつつ、科学的知見を駆使して大量の水を精製し、見事ジャガイモの栽培に成功する[図 2]。



図 2 (1:00:39)

映画は、ワトニーの火星におけるサヴァイヴァル生活の様態を詳細に描写すると同時に、彼を救出するためのプロジェクトが着々と進行していくさまも提示していく。ジャンルの最古典たる『搜索者』(ジョン・フォード、1956年)を参照するまでもなく、搜索と救出は西部劇に頻出する主題である⁹。そもそも、ワトニーが火星に取り残される原因となった火星の嵐は、古典的な西部劇における先住民の襲撃を代替するものと見なせるだろう。物語上の機能という点で、両者は同一の役割を担っている（むろん、修正主義西部劇を経た 21 世紀の今日、白人入植者を一方的に襲う「政治的に正しくない」インディアンの表象は不可能になっているし、そもそも火星に先住民は存在しないのだが）。

ワトニーが火星から脱出する直前に、髪を切り、髭を剃ったのも西部劇のカウボーイたちの身ぶりに通じる [図 3]。西部劇のヒーローは荒野と文明の媒介者であり、荒野での仕事を終えたカウボーイは文明世界に立ち戻るために身体的な変容を果たす必要がある。たとえば『無法者の群』(マイケル・カ

⁹ ワトニーは数千 km 離れた救出地点に向かうために、火星探査車（ローバー）を使用する（言わばこれが西部劇における馬の代わりとなる）。このとき車内を暖めるために廃棄されていたプルトニウムを掘り起こして運転手席の後ろに置く。核開発は技術面での最先端をいくという意味で「ニュークリア・フロンティア」と呼びうるが、現実のアメリカ西部のフロンティアとも関わりが深い。というのもそこでは実際に数多くの核実験が行われてきたからである。核と西部劇の関係については川本の前掲書第二章「アイアン・ホースからアトミック・ボムへ アメリカ西部の新旧のテクノロジー」を参照されたい。

ーティス、1939年)に見られるように、町にやってきたカウボーイたちは入浴、散髪、髭剃りを経て、その身体を文明社会に適応させるのである¹⁰。さらに、救出ミッションに際して、宇宙空間に投げ出されたワトニーを船長（ジェシカ・チャステイン）が捕まえようとする場面では、船長と宇宙船とを繋ぐ命綱がワトニーの身体に巻き付けられるが、これは西部劇でカウボーイが用いる投げ縄を連想させる [図 4]。



図 3 (1:53:43)

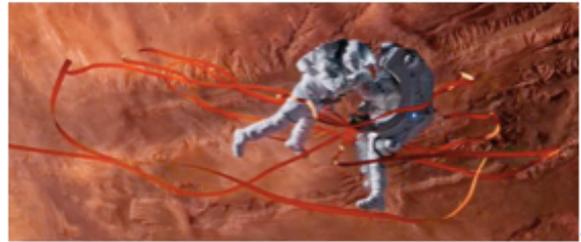


図 4 (2:09:09)

無事に地球（故郷）への帰還を果たしたワトニーが NASA で後進の育成に携わっている様子を映して映画は幕を閉じる。このとき、彼が「英雄」として描かれている点も西部劇に通じる。朝のベンチに腰掛けているワトニーの前を、宇宙飛行士を目指す訓練生たちがジョギングしながら通り過ぎていく。そのとき、訓練生たちはこの英雄的な存在に対して敬意のまなざしを注いでいく¹¹。さらに直後の講義場面では、彼の伝説を語り継ぐべく、ワトニーの話に熱心に耳を傾けている（英雄譚を後世に語り伝える場面は西部劇にも頻出する）。アンドレ・バザンがそこに「永遠の生」を看取した西部劇のフロンティア・スピリットは、こうして形を変えながら次世代へと受け継がれていくのである。

¹⁰ 西部劇における入浴表象とその機能については、川本の前掲書第三章「カウボーイと石鹸の香り 西部劇における男性の入浴シーンについて」を参照されたい。

¹¹ この場面に見られるベンチは、西部劇におけるポーチの上のロッキングチェアに相当すると言えるかもしれない。西部劇におけるポーチの力学については加藤幹郎『映画ジャンル論 ハリウッド映画史の多様な芸術主義』（文遊社、2016年）第1章「西部劇映画 荒野と文明の緩衝地帯」を参照されたい。